

獣性という概念——哲学、倫理学、動物の行動

メアリー・ミッドリー

木下頌子訳

**The Concept of Beastliness: Philosophy, Ethics and Animal Behaviour**

**Mary Midgley**

**Translated by Shoko Kinoshita**

Acknowledgement

Mary Midgley, "The Concept of Beastliness: Philosophy, Ethics and Animal Behaviour," *Philosophy*, Vol. 48, No. 184 (1973), pp. 111-135. © Royal Institute of Philosophy, published by Cambridge University Press, translated with permission

## 凡例

- ・ 本電子出版物は、Mary Midgley, “The Concept of Beastliness: Philosophy, Ethics and Animal Behaviour,” *Philosophy*, Vol. 48, No. 184 (1973), pp. 111-135の全訳である。
- ・ 原著の（ ）およびダークは、読みやすさを考慮し、適宜加除修正を加えた。
- ・ [ ] はすべて訳者による補足および訳注である。
- ・ 原著のイタリック体による強調は傍点強調で示した。
- ・ 本文中の引用文献については、邦訳のあるものは可能なかぎり、[ ] で付記した。
- ・ 本文中の引用に関しては、既訳をそのままないし若干の修正を加えて使用した場合には、その旨を明記した。それ以外は適宜既訳を参照しつつ独自に訳出した。

---

## 訳者謝辞

### Acknowledgements

本翻訳は、クレア・マックール、レイチェル・ボレン、イシュトバン・ザルダイ、In Parenthesis、メアリー・ミッジリー・トラスト、リヴァプール大学、日本学術振興会の支援に基づくものである。また、テキストの解釈に関して、イシュトバン・ザルダイ、鈴木生郎の各氏に多くの助力をいただいた。深く感謝申し上げます。

This Japanese translation is supported by Clare Mac Cumhaill, Rachel Bollen, István Zárdai, In Parenthesis, Mary Midgley Trust, University of Liverpool, and the Japan Society for the Promotion of Science. I'm grateful to István Zárdai and Ikuro Suzuki for their great help in interpreting the text.



## 獣性という概念——哲学、倫理学、動物の行動 メアリー・ミッジリー

どの時代にもその時代になじみの対立があるものだ。三十年前、人々はマルクスとフロイトを同時に受容し、格子模様の上におかれて困惑するカメレオンのように、生はなぜこうも不可解なのかと考えあぐねていた。今日同じような仕方でわれわれを悩ませているのは、いわゆる「人間本性 (Human Nature)」と呼ばれるものがあるのかどうかという問題である。一方では、動物行動学の研究が爆発的に進み、動物と人間の比較が頻繁に行なわれるようになった。そして動物から得られた証拠をもとに、人間は本性的に攻撃性をもつのか、本性的に縄張り行動をするのか——人間にいわゆる「攻撃本能」や「縄張り本能」があるのかどうか——ということが探求されている。しかし他方で、多くの社会学者や心理学者は依然として、人間がまったく本能をもたない生き物であるという「行動主義的」な考えを支持しているようである。実存主義的哲学者たちも同様だ。彼らの見解が正しければ、動物との比較はまったく役に立たない。(紙幅の都合上ここではどちらの説も単純化して論じざるをえなかったが、行動主義について単純化が過ぎるのではないと思われる方には、『ニュー・ソサエティ』[一九六二年から一九八八年にイギリスで発行されていた社会科学系雑誌]をしばらく読んでみていただければと思う。) 行動主義によれば、人間はその人が属する文化の完全な産物である。つまり、人間はいかようにも変形可能な状態で生まれ、育つ社会によって隅々まで形作られるのだ。したがって、文化ごとに生じる違いの可能性は無限に開かれている。この見解のもとでは、人間の本能だと考えられているものは、単にわれわれ自身の社会に深く刻み込まれた偏見にすぎない。われわれが家族を形成したり、暗闇で耳をすましたり、蜘蛛を見て飛び上がったたりすることは、すべて条件づけの結果にすぎないのである。「実存主義」は、一見すると、これとまったく別の立場に映るかもしれない。実存主義者は、人間の自由を強く主張する立場であり、人間が何かによって作られているなどということを認めないはずだからだ。しかし、実存主義も、人間が本性をもつことを否定する点では同じである。もし本性があるとしたら、人間は完全に自由ではなくなってしまう。だからこそサルトルは次のように主張している。「人間の本性は存在しない。・・・人間はまず先に実存し、世界内で出会われ、世界内に不意に姿をあらわし、そのあとで定義されるのである。実存主義者が考える人間が定義不可能であるのは、人間が最初は何ものでもないからである。人間はあとになってはじめて人間になるのであり、人間は自らがつく

ったところのものになるのである。」<sup>1</sup>〔訳注 本引用部分は伊吹訳の該当箇所をほぼそのまま使用し、前後の文脈に合わせて文末に若干の変更を加えた。〕

実存主義にとって、存在するのは「人間の条件」だけである。それは人間にたまたま生じることであり、生まれつきのあり方ではない。実存主義のもとでは、たとえば、われわれが暗闇を恐れるとすれば、その理由はわれわれが臆病者であることを選んだからである。また、自分の子供を他人の子供より気かけるとすれば、それはわれわれが偏愛的であることを選んだからである。人間本性や人間本能など一切口にすべきではないのだ。

この論文で行ないたいのは、第一に、人間の本性があるかどうかについての対立にもかくも光を当てることである。この対立は、間違いなく、あらゆる分野の人にとって知的に興味深いものだ。第二に、私自身の試みとして、この問題に動物の行動に関する知見に依拠してアプローチしたい。これは非常に興味深い切り口だと思われるが、これまで哲学者が十分に取り組んでこなかったものである。その理由のひとつが、運命論に対する恐れであることは間違いない。また別の理由として、「本能」や「人間本性」といった用語が過去にかなりひどく誤用されてきたことも挙げられる。そして三つめの理由は、一部にみられる馬鹿馬鹿しい動物行動学プロパガンダの存在である。まず、この最後の点から片付けよう。おかしな提唱者がいるからといってその科学分野をいちいち否定していたら、図書館はすぐに空になってしまう。こうした場合に必要なのは、もみ殻から小麦を選別することである。コンラート・ローレンツ〔オーストリアの動物行動学者〕を引用しよう。<sup>2</sup>

・・・私の敵に対する好意と感謝の気持ちをこっそり白状しなければならないとすれば、私は味方の一部を恥ずかしく思っていると云わざるをえないだろう。デズモンド・モリスは、非常に優れた動物行動学者でありものの分かった人だが、彼が『裸のサル——動物学的人間像 (*Naked Ape*)』〔日高敏隆訳、角川書店、1999年〕で人間の獣性を過剰に強調するのには、閉口した。もちろん、モリスがそうすることで人間と動物の共通点をひとつも認めがらない高慢な人たちに衝撃を与えようという立派な意図をもっていたのはわかる。だが、その試みによって、彼はひどく誤解を招く仕方で、人間がもつユニークな性質や能力を矮小化してしまっている。ヒトという生物種の傑出した、生物学的に重要な性

---

<sup>1</sup> *Existentialism and Humanism*, 28. 〔邦訳 ジャン＝ポール・サルトル、『実存主義とは何か』、伊吹武彦訳、人文書院、1996年。〕

<sup>2</sup> *On Aggression*, 3.

質は、部分的に体毛がないことでも「性的魅力」でもなく、概念的思考の能力である——もちろん、これはデズモンド・モリスも完全に認識している事実だ。別の理由になるが、ロバート・アードレイもまたモリスと同じくらい私を強く苦しめている作家の一人である。

こうした動物行動学という広範な知識の集積の上に、ローレンツ自身も、先見の明をもって英米ではなく大陸で教育を受けた科学者たちに特有の——と言ってよかろう——見通しのよい概念的理解を付け加えている。(これはティンバーゲン〔ニコラウス・ティンバーゲン。オランダの動物行動学者・鳥類学者〕やアイブル＝アイベスフェルト〔イレネウス・アイブル＝アイベスフェルト。オーストリアの動物行動学者〕、そしてあの高名な老人ヴォルフガング・ケーラー〔ドイツの心理学者〕についても言える。<sup>3)</sup>そこで、ローレンツが例外的だとか全面的に正しいと言うつもりはないのだが、話を簡単にするためにも本論文では主としてローレンツの議論、とりわけ彼の著作である『攻撃——悪の自然誌 (*On Agression*)』〔日高敏隆・久保和彦訳、みすず書房、1970年〕に焦点を当てることにする。なお、彼の場合と同様に、ここには方法論上の問題がある。私の議論の中心となるのは、人間と他の生物種の比較が、どんな場合に、どのように意味をなすのかを示すことだが、その議論の過程においてそうした比較自体を使わざるをえない場合がある。この点は、信仰や倫理観からそもそもこうした比較が考えられない人にとって問題と感じられるだろう。この循環が無害であることは後にわかるはずだが、ここで前もって私が提示するつもりの方針を述べておこう。その方針とはすなわち、比較は、当の生物種の全体的な特徴が考慮され、種同士の類似性を生み出しているさまざまな既知の原理との関連づけがなされる場合にのみ意味をなす、というものである。するとたとえば、レミングの自殺〔訳注 増えすぎると集団自殺をされると言われている〕やハムスターの間引きを、それだけみて、人間の自殺や間引きと比較するのは妥当でない。しかし、その行動とそれに関わる他の習慣やニーズとの関係に注目し、当該の種の本性全体を考察の対象とするときには、比較は可能かつ有益でありうるのだ。

それでは他の反論に移ろう。

(1) 運命論に対する恐れに関しては、多くを語るつもりはない。この文脈ではまったく見当違いだと思われるからだ。遺伝学的要因は、人間の行動をすべて決定するものとして理解される必要はない(この点で社会的要因と同様である)。どちらの要因であれ、勝ちが決定づけられていると考えるならば憂慮すべきだが、両方の要因の存在を認めた

---

<sup>3</sup> *The Mentality of Apes*, esp. chs vii and viiiを参照のこと。

からといって、そのどちらか一方の勝ちが決まっていると考える必要はないだろう。自分が本性的に短気だと知ることは、自分を怒りに任せることを促すわけではない。むしろ反対に、短気さが本性的であると知ることは、自分の怒りっぽさと道徳的憤慨を区別することにつながり、怒りを抑制することに貢献するはずだ。それゆえ、本性を認めたからといって、特段われわれの自由が脅かされるとは思われない。これは動物との比較に基づいて人の短気さの意味を明らかにしようとするどのような試みについても言える。

(2)「本能」のような言葉についてはまた別の問題である。ローレンツやティンバーゲンを始めとする動物行動学者たちがこうした語に関して多くの仕事を費やしてきたおかげで、それらは再び使用に耐えるものになっているように思われる。こうした語は、「動物行動学」という名を与えられた研究分野——今世紀の訓練された動物学者たちによって取り込まれてきた、動物の行動に関する詳細かつ体系的で過酷な研究分野——において、十分明確かつ穏当な仕方使われているのだ。その実際の用法については後ほど詳述しよう。

一般的に言えるのは、動物たちが明らかに、常々考えられてきたよりもずっと体系的で秩序ある生活を送っているということだ。したがって、ある特定の側面に関しては、人間とそれほど違いがない。(もちろん他にたくさんの違いはあるが、それはまた別の側面に関する違いである。)けれども、われわれは伝統的に、自分たちが混沌の海に浮かぶ秩序の島であるという誇りを抱いてきた。ローレンツたちが示したのは、これがとんでもなく馬鹿げた迷信だということである。そうだとすれば、われわれの人間観にも様々な変化が迫られるはずだ。なぜなら、これまでの人間観は、人間と動物の間にあるとされた対比をもとに築かれたものであり、そしてこの対比は、動物たちをあるがままに見るのではなく、われわれ自身の恐怖や欲求を投影して見ることで形成されたものだからである。たとえば、人々が思い浮かべるオオカミは常に、羊の群れから子羊を奪う瞬間に羊飼いの目に映るオオカミである。しかしこれでは、羊飼いが子羊を肉にしようと決めた瞬間に子羊に与える印象によって、この羊飼いを評価するようなものだ。最近では、労を惜しまぬ動物行動学者たちが、オオカミたちを食事以外の時間も含めて体系的に観察した結果、オオカミたちは、人間の基準で見て、規則正しさや美徳の鑑であるということが判明している。オオカミたちは番つがいを作って暮らし、伴侶や子どもに対して忠実で愛情深く、群れには強い忠誠を示し、困難に大きな勇気と忍耐をもって挑む。互いに他の者の縄張りを尊重するよう注意を払い、巣を清潔に保ち、夕飯に必要なもの以外を殺すことはほとんどない。オオカミ同士が闘うときには、一方が降服することで終わる。通常の場合、命乞いをする者を殺したり、メスや子どもを攻撃したりすること

は絶対に抑制される。またオオカミたちの中には、すべての社会的動物と同様、挨拶や励ましなどの細かく区別された儀式を含む、かなり洗練された礼儀作法が浸透している。それらは、友情を強化し、協力を成立させ、社会生活全般をうまく回す潤滑油の役割を果たしているのだ。以上のことは、通りすがりの旅行者が抱くロマンチックな印象ではない。これらは、訓練された動物学者たちが、長大な映像記録、グラフ、地図、集団調査、糞の分析といった現代のあらゆる道具を総動員し、長期にわたって注意深く行なった探求の成果である。しかも、こうした調査は多くの場合、当初はむしろオオカミを敵視していて、さまざまな問題をオオカミのせいにすることを願っていた関係当局によって着手されたものである。そのため、北極諸島でオオカミたちの調査を行っていたファーリー・モウエット〔カナダの環境保護論者・作家〕は、シカの数の急激な減少が、（数世紀に渡ってやり方を変えていない）オオカミたちのせいではなく、（技術を変えた）ハンターたちのせいだと示されたのを見て、調査結果を何度も棄却していた<sup>4</sup>。

このように、現実のオオカミたちは、市井のオオカミ像に大して似ていない。類人猿やその他の生物についても同じことが言える。にもかかわらず、哲学者たちが取り上げてきたのはもっぱら市井の動物像である。哲学者たちが、「野蛮」、「残忍」、「獣じみた」、「動物的欲求」といった言葉を使う背後には、残酷な無法者という一般的なイメージが引き継がれている。そして、そうしたイメージは、人間の本性を浮き彫りにするための対比として無批判に用いられてきたのだ。つまり、人間は、ほぼ架空の目印を参照点にして、位置づけられてきたことになる。この慣習はあまりに古くから続く根深いものなので、問題の哲学的議論に入る前にこの点についてもう少し述べておこう。こうした状況がいかに奇妙であるかをきちんと認識するならば、このトピック全体を最初から否定してかかることはできなくなるだろう。一部の人々が動物について馬鹿げた考えをもっているという事実は、このトピックを深刻なものにせずにはいられない。動物は、チューインガムやウォータースキーのように、単に人々が楽しむためのもののひとつではない。むしろ、動物はわれわれ自身が属している集団である。われわれは、単にいくらか動物に似ているのではなく、動物そのものである。われわれと近縁動物たちの間には著しい違いがあるかもしれないが、動物との比較はわれわれの自己理解にとって常に重要であり続けてきたし、まさにそうあるべきである。それゆえ、この〔人間と他の動物との〕隔たりが、もし私が考えている通り、伝統的に想定されてきたのとは少し異なるところにあり、しかもずっと小さいのだとしたら、それは重大な問題である。伝統的な動

---

<sup>4</sup> Farley Mowat, *Never Cry Wolf* [邦訳 ファーリー・モウエット『狼が語る——ネバー・クライ・ウルフ』、小林正佳訳、築地書館、2014年。]; Murie, *The Wolves of Mount McKinley*. [邦訳 アドルフ・ムーリー『マッキンリー山のオオカミ』上下巻、奥崎政美訳、新思索社、1975年。]

物観によって倫理学の議論は歪められてきたにちがいないし、また人間に開かれた可能性についても誤った見方が生じてきたかもしれないからだ。

では、オオカミの話に戻ろう。動物行動学者たちによって詳しく記録されたオオカミの姿と伝統的なオオカミ観との間の著しい相違については一目瞭然である。以前、オオカミたちに関する非専門的な本を読んだことがあるが、そのなかで中世フランスにおいて罾にかかったオオカミたちが、さまざまなひどい仕方で、生きたまま皮を剥がれる様子が詳細に綴られていた。そこで著者は次のような意見を述べていた。「これは相当残酷な仕打ちであっただろうが、そもそもオオカミ自体が残酷な獣である」。何と自然に聞こえる言い分であろうか。オオカミが実際に人間の皮を生きたまま剥ぐのか考えてみることも、この種の行為に少しでも関心を示す唯一の動物がホモ・サピエンスであるという事実を認めることもよほど難しいのだろう。さらに、この著者はオオカミの「裏切り行為」に対しても不満を述べている。つまり、オオカミたちは、人間にこっそり忍び寄り、相手が自衛する時間を与えないほど突然に襲いかかるというわけだ。この著者には、オオカミたちが常に正々堂々と警告を与えていたら飢え死にしてしまうだろうという考えはまったく浮かばないらしい。実際のところ、伝統的に、オオカミたちは肉食であるかどで非難されてきたが、これは二重の意味で驚くべきことだ。というのも、オオカミを非難する人々自身、たいてい肉を食べているのだし、さらにはオオカミと違って、人間は肉を食べざるをえない胃腸をもつわけでもないのにそうしているからだ。

オオカミたちにみられる節度は、他の多くの肉食動物や、強い武器を備えた草食動物にも見いだせるようだ。殺害行為があまりに容易い生物種の場合、そうした行為を厳格に抑制する働きが不可欠である。そうでなければ絶滅してしまうからだ。（もちろん、この抑制は道徳律ではないわけだが、多くの点で道徳律と似た仕方で働く。）他方、あまり強い武器をもたない動物たちに、こうした抑制機構は必要ない〔そのため備わっていない〕。ローレンツ<sup>5</sup>がノロジカとハトの凄惨な例を挙げているが、それによると、このどちらの種でも、複数のメンバーを一緒に閉じ込めると、強いメンバーたちが弱いメンバーをじわじわ殺してしまう。これらの生物たちは、通常の状態では、勝者の抑制を当てにすることによってではなく、逃げることで身を守っているからである。さて、人間がオオカミよりこちらのグループに近いことは痛いほどに明らかだ。

道具を使い始める以前の人間は、かなり武装が貧弱な動物であった。嘴や角がない人間にとって、殺害は非常に面倒でうんざりする仕事だったはずである。そのため、殺害を抑制する習性を備えることは、生存に必要ではなかった。その後、武器を発明する頃

---

<sup>5</sup> *King Solomon's Ring*, 192 [邦訳 コンラート・ローレンツ『ソロモンの指環——動物行動学入門』、日高敏隆訳、早川書房、1998年。]

になると、もう本性を変えるには遅すぎた。人間はすでに危険な獣になってしまったのだ。戦争と報復は、最近現れた異常事態ではなく、原始からある人間の慣行である。多くの宇宙論では天界の内乱が自明のものとなっているし、『イーリアス』〔トロイ戦争の最後を描く叙事詩〕や『サーガ』〔中世北欧の英雄物語〕、『士師記 (*Book of Judges*)』〔旧約聖書に含まれる書物のひとつ〕でも当然のように殺戮が描かれている。人類学者たちの報告を信じるならば攻撃的でない社会もあるのだろうが、それは非常に稀有であり、またひょっとすると実際には伝えられているほど平和ではないかもしれない(この点は後ほど論じる)。哺乳類のなかで、人間ほど自分の種に対して残酷になれる動物は他にいないように思われる。ローレンツが挙げた獣たちのなかで、この点において人間に匹敵するのは、間違いなくネズミくらいだろう。ネズミは、通常、出会った別の部族のネズミを片端から殺そうとするらしい。ただその代わりに、決して自分の部族のネズミを殺したり、互いに激しく闘ったりすることはないようだ。したがって、ネズミも、カインやロムルスとは比べ物にならないし、ひとつの石で七〇人に及ぶ兄弟全員を殺した、ギデオンの息子アビメレクには遠く及ばない<sup>6</sup>。「危険」という言葉は、まさにこんなことをする動物にこそふさわしいだろう。

しかし、人間はずっとそう考えてこなかった。人間——文明化された西洋の人間のことだが——は、自分たちだけが、血に飢えたこの世界のなかで比較的無害な存在だと常に主張してきたのである。たとえば、ヴィクトリア朝時代のハンターたちがアフリカのジャングルをどう捉えていたかを見てみるとよい。ハンターは、出会った動物たちはみな自分を攻撃してくるものだと決めてかかっていた。それゆえ、動物を目にするとすぐに撃っていたのである。もちろんハンターはその動物を食べたがらなかったが、いつも剥製にすることができた(人間の敵に対して勝ち誇るためである)。何にせよ、ハンターは動物を有害なもののみなしていたのである。ジャングルの動物は、彼の記憶に「巨大なけだもの」として刻まれていたにちがいない。また、同じようにまったく現実味のない役目を充てがわれた——そしてそれゆえに撃たれた——ジャイアントパンダの絵も存在する。しかし近頃では、猟区管理人や写真家たちは常々、大きな犬に対するのと同じようにライオンと親しく接している。ライオンは、十分餌を与えられ、挑発を受けないかぎり、平均的なジャーマン・シェパード並みに攻撃性が低いということがわかっているのだ。象や他の大きな動物についてもだいたい同じことが言えるようである。これらの生き物たちは自分の生息地をもっており、ひどく心を乱されないかぎり、好んで

---

<sup>6</sup> Judges, IX. 5

喧嘩をしたりしない。とりわけゴリラは、平和を愛する獣である。シャラー<sup>7</sup> [ジョージ・シャラー。ドイツ生まれのアメリカの生物学者・作家] は、ゴリラの群れのもとに六ヶ月間滞在したが、その間に悪態をつかれることも、特筆すべき争いを見ることもほとんどなかったという。ゴリラに関して言えば、またおそらく他の動物についてもそうだろうが、ヴィクトリア朝時代の人々は、威嚇的な行動と攻撃を混同して誤解していたのだろう。ゴリラはたしかに威嚇するが、その目的は戦闘を避けることにほかならない。恐ろしそうに見せることで、ゴリラの長は侵入者を追い払い、実際に闘う危険や困難を避けて一族を守ることができる。同様のことは他の類人猿にも言えるだろう。とくに、ひどくけたたましい叫び声でしばしば先の白人ハンターを震え上がらせていたホエザルがよい例だ。ホエザルたちは、戦闘活動を最小限で最も満足のいくものに変えてきた。ホエザルの集団同士が縄張りを争うとき、彼らは両者ともに座って、力いっぱい吠える。そして、より大きな音を出した側が勝ちとなるのだ。こうして見ると、このジャングルで最も危険だったのは、心臓をバクバクさせ、引き金に指をかけていたこの臆病な白人である。彼がもっていた武器は、最も体の大きい動物たちと少なくとも同程度には強力であった。しかも、動物たちが、食糧になるものや本当に迷惑な相手にしか攻撃しないのに対して、この男は銃で狙える大きさのものなら何でも撃ったはずである。いったいなぜ彼は、動物たちが自分より残忍であるなどと考えたのだろうか。また、なぜ文明化した西洋の人間は、そうした考えを常にもってきたのだろうか。

昔の人がオオカミたちを嫌っていたことに驚きはしない。自分を食べようとする動物がいたら、その動物を好きになるはずはないし、ましてやそれに協力しようとするのはごく一部の仏教徒くらいだろう。けれども、なぜ人間は自分の方が倫理的に優れていると思ってきたのだろうか。オオカミが人間を狩るのは、人間がシカを狩るとまったく同じことだと考えられなかったのだろうか（もっとも、そのように考えている部族も存在するが、ここで考察しているのは西洋の思想である）。ローレンツが指摘するように、人は自分が人間以外の動物を食べているにも関わらず、肉食を非難しがちである。まるで他の動物たちが同じひとつの種に属していて、肉食をすることは共食いに当たるかのように非難するのだ。ローレンツは次のように述べている。「ふつうの人間は、野ウサギを殺すキツネを批判するとき、キツネを、まったく同じ目的のために野ウサギを撃つハンターと同列に見てはいない。人々は、農民を撃って夕食の揚げ物にしている森番に向けるような態度でキツネを激しく糾弾するのだ。」キツネたちが遊びや練習のために、食糧にする量以上の雌鳥を殺す場合、こうした非難はいっそう強くなる。しかし、その

<sup>7</sup> G. Schaller, *The year of the Gorilla*. [邦訳 ジョージ・B・シャラー『ゴリラの季節——野生ゴリラとの600日』、小原秀雄訳、1966年、早川書房。]

ような非難を聞いて、まさか人がキツネを狩っているなどと誰が想像できるだろう。同様に、チンパンジーの印象は、ジェーン・グドール<sup>8</sup> [イギリスの動物行動学者・霊長類学者] の報告によって非常に悪いものになっている。グドールが観察したチンパンジーたちは、普段ヒヒやコロブスと共に仲良く過ごし、子ども同士は一緒に遊んだりもするのだが、ときおりそのヒヒやコロブスの子供を捕まえて食べたというからだ。けれどもその一方で、伝統的な農園では何が起きているだろうか。

歌うがいい、おばかさんのアヒルの子、殺してやるからこっちにおいて  
お前のお腹にたくさん詰め込んで、お客を満腹にしなきゃいけないんだから

なぜこうした類比が認識されづらいのだろう。その理由は、思うに、人間が常に自身自身の獰猛さを認めたがらず、動物たちを本来より獰猛なものとして描き出すことで、自身の獰猛さから目を逸らそうとしてきたからではないだろうか。そしてときには、現実の動物を非難したり、罰を与えたりもしてきたのだ。オオカミの皮を剥ぐような慣習には、おそらく罰を与えるという意図があったのだろう——もっとも、この意図は迷信と区別できないようなものであるが。さらに、動物たちの「邪悪さ」は、人が動物を殺したり彼らに何らかの害を与えたりすることを正当化するためにも使われてきた。しかし、獣たちが熟慮に基づいて行動できるとも考えないかぎり、これは馬鹿げた正当化である。おそらく、他の生物種に対するこうした根拠のない優越感を持ち出すよりも、自身の種に対する自然な忠誠心を引き合いに出す方がまだましであろう。とはいえ、いま私がより関心をもっているのは、「外の獣 (Beasts Without)」の扱いではなく、哲学の議論で使われてきた「内なる獣 (Beast Within)」である。

哲学者が描く「内なる獣」は、何ものにも囚われない無法の怪物である。この描像は、そのあり方を批判するプラトンのようなモラリストにも、逆にそれを支持するニーチェのような人にも共有されている。以下は、『国家』の第九卷の代表的な一節であり、ここでプラトンはわれわれが抱く卑劣な欲望について語っている<sup>9</sup>。すなわち、そうした欲望は、

魂の他の部分、理知的で穏やかで支配する部分が眠っているとき、他方獣的で猛々しい部分が、食物や酒に飽満したうえで、跳びはねては眠りを押しのけて外へ出ようと求め、自分の本能を満足させることを求めるようなときに、起こ

<sup>8</sup> Jane van Lawick Goodall, *My Friends the Wild Chimpanzees*.

<sup>9</sup> *Republic*, IX, 571c. [邦訳 プラトン『国家』、藤沢令夫訳、岩波書店、1979年。]

るものだ。このようなときには、君も知るとおり、それはあらゆる羞恥と思慮から解放され釈放されたかのように、どんなことでも行なってはばかるところがない。すなわち、想像の上ながら母親と交わろうとすることにも、その他人間であれ神であれ動物であれ、誰かまわらず交わろうとすることにも、何のためらいも感じない。どんな人殺しでもしようとするし、どんな食べ物にでも手を出して控えることをしない。要するに、愚かさにも無恥にも何ひとつ不足するところはないのだ。

〔訳注 訳文は、藤沢訳の当該部分をそのまま使用した。〕

この獣のイメージはなじみ深いものだが、それがいかに奇妙であるかを考えてほしい。なぜ「自分は気の迷いでこうしたことを考えてしまう」と言わないのか。あるいはせめて、なぜ自分の内にいる「他人」と言わないのだろうか。「獣」を持ち出すことで何が得られるというのだろうか。

またニーチェは<sup>10</sup>、慣習の鎖を壊すものとしてのライオンについて、次のように語っている。

新しい価値のために自由を手に入れることは、獅子の力にしかできない。

自由を手に入れ、義務に対してすら聖なる「否<sup>ナイン</sup>」を言うこと。わが兄弟たちよ。このためには獅子が必要なのだ。

〔中略〕

精神はかつて「汝なすべし」をみずからのもっとも聖なるものとして愛した。今や精神はこのもっとも聖なるもののなかにすら、妄想と恣意とを見出さざるをえない。こうして彼はみずから愛していたものから自由を奪いとる。この強奪のために獅子が必要なのだ。

〔訳注 訳文は、佐々木訳の当該部分をそのまま使用した。〕

しかし、そんな獣はこの世に存在しないのだ。ある「獣」について語ることは、ある独自の法則のもとで生きるものについて語ることである。もし本当にライオンたちに何の制約もないとしたら——たとえば、クロコダイルと番になったり、縄張りを無視したり、毒蛇を食べたり、自分の子どもを殺したりしていたら——、彼らはライオンではないこ

<sup>10</sup> *Thus Spake Zarathustra; Discourse Of The Three Metamorphoses*. 〔邦訳 フリードリヒ・ニーチェ 『ツァラトゥストラかく語りき』、佐々木中訳、河出書房新社、2015年。〕

どになるし、そもそもひとつの生物種として存続することもないだろう。この抽象的な「獣」は、十八世紀に流布した抽象的な「野蛮人 (Savages)」——高貴な「野蛮人」にせよそうでないにせよ——と同じレベルの幻想である。(ジョンソン博士 [サミュエル・ジョンソン。イギリスの文学者] の言葉を借りて言えば、「空想好きな人々は、野蛮人たちがもっている神話について語るが、それは作られたものでしかない。・・・野蛮人たちから彼らの信仰についてどんな説明を得られるというのだろうか」<sup>11</sup>。) この神話に対して人類学が行なったことを、いま動物行動学は獣神話に対して行なっているのである。キップリング [ラドヤード・キップリング。イギリスの作家・詩人] の「ジャングルの法」の方が、このモラリストたちの幻想より現実に近い。とりわけ奇妙なのは、獣たちが性に関して非常に放縦だとされていることだ。デズモンド・モリスの指摘を待つまでもなく、ホモ・サピエンスほど並外れて性生活に時間と関心を割いている動物はいない。大部分の生物種にとって、性生活は短い発情期に単純な本能的パターンに従って行なわれる、手順の決まった季節のお祭りごとである。クリスマスショッピングのようなものだ。性生活は、まさに人間の生においてこそ——良くも悪くも——、ずっと重大で中心的な役割を果たしている。他の種において、フロイトの理論が展開されることなどありえなかつただろう。特にゴリラは性交にあまりにも関心がなく、ロバート・アードレイに大変な衝撃を与えている<sup>12</sup>。しまいには彼は、ゴリラたちが衰退のさなかにあると結論づけているほどだ。にもかかわらず、たとえばトルストイ<sup>13</sup>は、ひたすら性的享樂に耽る生活について語る際、それを「サルやパリジャンの理想」と呼んでいる。

このように、人間の外に「無法の獣」など存在しないとすると、そうした「獣」が人間の内にいるというのは非常に奇妙な話である。むしろ、内なる獣はわれわれに秩序をもたらす一助を担っていると考える方がずっと自然だろう。概念的思考は、それを補完する役目を果たしているにすぎない。ところが実際に広まってきたのは、これとは逆のア・プリオリな推論である。つまり、もし「内なる獣」にあらゆる悪事を働く力があるとなれば、「外の獣」も同様だろうという推論が行き渡ってきたのだ。この考えによっ

<sup>11</sup> Bowswell, *Life of Johnson*, Everyman 2, 34. [邦訳 ジェイムズ・ボズウェル『サミュエル・ジョンソン伝』全3巻、中野好之訳、みすず書房、1981~1983年。]

<sup>12</sup> Robert Ardrey, *African Genesis*, 126-127 [邦訳 ロバート・アードレイ、『アフリカ創世記——殺戮と闘争の人類史』、徳田三郎、森本佳樹、伊沢紘生訳、1973年]; Schaller, *The Year of the Gorilla*.

<sup>13</sup> L. Tolstoy, *The Kreutzer Sonata*, ch. ii. [邦訳 レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ『イワン・イリイチの死／クロイツェル・ソナタ』、望月哲男訳、光文社、2006年。] 人間の性行動と他の霊長類の性行動のさらなる比較としては、Wickler, 'Socio-Sexual Signal', in D. Morris, *Primate Ethology*, 1967を参照のこと。また、いくつかの無神経で明らかな誤りはあるものの、*The Naked Ape*も参照のこと。Eibl-Eibesfeldtの*Love and Hate* [邦訳 アイブル＝アイベスフェルト『愛と憎しみ——人間の基本的行動様式とその自然誌』、日高敏隆・久保和彦訳、1986年、みすず書房、新装版] は、問題全体を文脈のうちに非常によく位置づけている。

て、人間は、他のあらゆる生物種との違いを強調するよう駆り立てられ、自らが重視するすべての活動を、根拠があろうとなかろうと、動物たちと共有していない能力に基づけようとしてきたのである。もっとも、こうした〔悪事を「獣」のせいにする〕言い逃れは、ある意味では、人間という種の品位を示すものだとも言える。というのも、そこには自分の行動に対する恐怖が反映されているからだ。人間は自身の罪の意識を恐れ、それをはっきりと外部にある異質なものに訴えることで取り除こうとする。「内なる獣」は「悪の問題 (Problem of Evil)」を解決するというわけだ。それゆえこの方法は、人間の良心の力を示す、人間の品位の証ではあるのだが、それと同時に危険なうそでもある。私が思うに、このように「内なる獣」を人間の邪悪さのスケープゴートとして使うことは、有害な混乱を引き起こしてきた。それは、獣たちについての混乱（こちらはひょっとするとさほど重大ではないかもしれない）だけでなく、人間についての混乱を導いてきたのだ。おそらくこの混乱は、男が「女に唆されて食べた」と言い、さらに女が「蛇に唆されて食べた」と言い出した時点から始まっていたものであろう。

ここで、原始人の境遇を考えてみよう。彼には、弱いものであるとはいえ、本性的な心の抑制がいくらか備わっている。彼は、ハトやノロジカとは違って、挑発されてもいないところで冷酷にも進んで自分の家族を八つ裂きにすることはできない。（もしそれができていたら、間違いなく、人間は武器を発明するやいなやすぐに滅びていただろう。また、長期間助けを必要とする人間の子供の無力さは許容されえなかつただろう。）人間はそうした行為に対する一定の嫌悪感を本性的にもっている——弱く、覆されがちなものであるとはいえ。人間はぞっとするような恐ろしいことをして、その後で激しく後悔する。この葛藤は前理性的である。それは、理性と原始的な動機との葛藤ではなく、二種類の原始的な動機同士の葛藤なのだ。つまり、この葛藤は思考の結果として生じるものではなく、むしろ最初に人間に思考を促す原因の一部である。人間は社会的条件づけによってこの葛藤をもつようになったのではなく、むしろこの葛藤が社会的条件づけの部分的な原因になっているのだ。知性は、苦境を追いやる強さや、苦境から目を逸らす鈍感さのない人間がそれに対処する手段として進化した。そして、今述べた葛藤は何よりも大変な苦境である。原始の書物が殺戮や罪、報復に溢れていることは、人間がかなり初期の時代からこうした問題を抱えていたことを示唆している。さらに言えば、弱いけれども本物の心の抑制を備えたこの中間的な種類の生物でなければ、道徳を発展させることはなかつただろう。概念的思考は、本能から生まれたものを形にし、拡張させるものなのである。

こうした原始の人間についての描像がまったく見当違いではないことを示すために、ここで、『イーリアス』にみられる青銅器時代の人のふるまいについて少し触れておこ

う。『イーリアス』を選ぶのは、私が不満を抱く近代の伝統の背後にはプラトンがあり、さらにその背後にこの書があるからである。もちろん私はこの書が、「実際の原始の人間」に関する本物の原始的記録であると誤解しているわけではない。だが、他に何ができよう。ともかくもこれは、われわれが理解できる形で残っている最も古い書物のひとつであり、そこから連なる伝統をわれわれは引き継いでいるのだ。

先に述べた降服の儀式の問題を思い出そう。屈服した敵には嘔み付くことのできないオオカミの話だ。これに関してローレンツは次のように述べている。「ホメロスが描く英雄たちが、ウィップスネード〔イギリスのベッドフォードシャー州にある村〕のオオカミたちほど心優しくなかったことは確かである。詩人が語る数々の場面において、英雄たちは、良心の呵責を伴うにせよ伴わないにせよ、命乞いをする者たちを虐殺しているのだ。」たしかにその通りである。しかし、興味深いのは嘆願があったという点だ。注意深く数えてみたところ、その成功率は暗澹たるものであった。六回の嘆願がなされ、六回とも却下されている。さらに、命乞いをした人々はみなトロイ人、つまりは「向こう側の」者たちである。それらの虐殺の目的の一部は明らかに、ギリシア人の力を見せつけ、惨めな敵に対して勝ち誇ることであった。ここまでのところ、かなりひどい話である。だが、重要なのはここからだ。慈悲をかけることを拒んだアキレウスの説明によれば、彼は友人パトロクロスが殺される以前には、捕虜たちを生かしたまま連れてきて売る方を好んでいたという。つまり、友人を失くした悲しみと復讐心が、彼のふるまいを変えたのである。実際、これらの出来事のほとんどが起こっているのは、ちょうど戦が山場を迎える時期である。当然ながら戦争にはそれほど激しくない段階もあったはずだが、そこにホメロスが詠むに値すると思う出来事はなかったようだ。他の例では、二人の嘆願者が巨額の身代金を申し出て、一人はそれが受けいれられる寸前まで行っていた（結局、捕獲者の兄弟が割り込んできてその取引は阻止されてしまったが）。もちろん『イーリアス』は貴族の文書なので、こうした取引の背後に働いている損得勘定について語られることはほとんどない。ただ、そうした損得勘定が文明化を促す大きな役割を担っていたことは明らかである。強欲と怠惰は、しばしば暴力と天秤にかけられてきたものだ。しかし、暴力と釣り合うのは、強欲と怠惰だけなのだろうか。無力な者を殺すことそのものに対する直接的な抵抗はないのだろうか。私はあると思う。その理由はこうだ。ホメロスの作品の雰囲気は、極めて正直で、偽善がない。見かけを取り繕うために高貴な感情を示す者は登場せず、もしそうした人がいても誰も信じはしないはずだ。けれども、『イーリアス』には、戦争と暴力に対する両義的な態度が通底している。戦争や暴力は、人が従事する最も高潔な仕事だが、一方では人類にとって、ひどく痛ましい、悲惨な災厄である。ここにも、至って誠実な感情が鳴り響いている。戦争の神は、

それがいなければすべてがうまく行ったと言わんばかりに、常に厄介な災いのもととして罵られている。そして、戦場で却下される嘆願が描かれる一方、嘆願者の権利や、それを踏みにじる者への神の怒りについても、紙幅が費やされている。それより後のギリシアの書物を見ると、こうしたホメロスの考えは適当なごまかしとして書かれていたたわけではなく、またそう受け取られていたわけでもないことがわかる。嘆願者の権利は、悲劇作家たちにとって非常に深刻な主題となっているのだ。またそうした権利は、社会契約説の議論や自己利益のための考慮に基づいて擁護されるのではなく、ただそれを踏みにじる行為の恐ろしさを強調することに支えられている。ホメロスが描く嘆願は、たとえ無益に終わるとしても、しばしば強く心を打つ。事実、この強い両義性ゆえに、『イーリアス』は、殺人鬼目録ではなく、偉大な詩たりえている。要するに、この詩には二つの声が流れているのだ。この詩は、一方で誇りとするものを他方では嘆き悲しみ、そしてその責を誰かに問わずにはいられない。

だが、誰を責めればよいのか。それが問題である。『イーリアス』においては、獣は必要とされない。この書において、悪の問題への答えは常に単純である。敵を責められないときには、神々を責めればよいのだ。

このスケープゴートとしての神の役割は、宗教史のなかであまり注目されてこなかったが、非常に重要な点だと思われる。人が罪の意識を感じ、自らが傷つけた者たちに謝罪したいと強く願っているとき、自分がどうにもできない外部の力に惑わされていたという筋書きはとても都合がよい。そう捉えれば、自尊心を守り、犠牲者との仲間意識さえ保たれる。今日なら、「自分に何が降りかかったのかわからない」と言うところだが、ホメロスが描くギリシア人たちはわかっていた。ゼウス〔全知全能の最高神〕やアレス〔戦いの神〕の仕業だと言えたのである。『イーリアス』に登場する極めて卑劣で愚かな行為の数々は、神々の入れ知恵が原因となって起こっており、心から謝罪しようとする人は皆そのことを率直に述べている。最も露骨な例を挙げるならば、アキレスとの馬鹿げた争いをついに終わらせようとしたアガメムノン、謝罪する際にゼウスが自分の気を狂わせたのだと弁解している。これは注意深い読者ならば目を丸くする話である。というのも、この件について語られたところによれば、それは神が介入しなかった数少ない事例のひとつだったからだ。けれども、アガメムノンの推論は単純である。すなわち、もし自分がやったのならば、自分は気が狂っていたにちがいない、そして、王の気を狂わせられる者はゼウスのみである。「主が破滅を望む者は、まず理性を取り去られるだろう」というわけだ。アガメムノンに雷が落ちることはない。彼の弁解はこのホメロスの世界で受けいれられているのである。

この都合のいい論法が宗教と道徳の発展によって終止符を打たれてしまったのは、も

はや同情すべきことであるかもしれない。だが、それは運命づけられていた。ギリシア人がもつ神々の観念が次第に高貴で威厳あるものになっていくにつれ、「自分が犯す過ちを誰のせいにするのか」という問題が再び急務となる。神々の善性を繰り返し主張した最初のギリシア人であるプラトンが、同時に「内なる獣」という考えを積極的に提唱した最初の人であったことは決して偶然ではないだろう。彼が悪をなす主体について述べるときにはいつも、黒馬、オオカミ、ライオン、タカ、ロバ、豚が現れる。プラトンにとって、動物たちは悪の主体について語るための手段を提供するものなのである。動物たちがただの表現上のあそびでないことは確かだ。プラトンの文章にそんなものはない。プラトンはまじめに次のように考えていた。魂にとって、悪はまったく異質であり、「他なるもの」である。それは、人に本来備わった本性にしみこんできて墮落させる身体の働きなのだ。この油断ならない要素は、明らかに人間本来のものではありえない。それゆえ、動物によって説明されねばならない。だが、特定の動物というわけにもいかない。あらゆる個別の動物には、欠点もあればそれを補う特徴もあるからだ。そこで出てくるのがすべての悪癖を組み合わせたとんでもない怪物である。それこそが「内なる獣」であり、その唯一の敵は理性的な魂である。もちろん、ときには善い感情が生じ、それが「善い獣」としての身体に与えられることもあるが、その善さは理性に従うことによるのであって、それ自体が何かを成し遂げたことによるわけではない。白い馬<sup>14</sup>は喜んで御者にただ従い、御者が黒い馬を押さえつけるのを助ける。危険を冒して自ら御者に提案するバラムのロバとは違うのだ。したがって、身体が魂に善い提案をすると考えられる場合、そこでもたらされるのは、恥や野心、自尊心と名付けられるような感情であって、決して哀れみや愛情などではない。プラトンの描像にそのようなものを認める余地はないのである。

アリストテレスは、概して、プラトンよりもずっと自然界と人間を連続的に捉えているが、それでも同じように人間と獣を奇妙な仕方で対比させることがある。『ニコマコス倫理学』<sup>15</sup>のなかで、彼は人間の幸福が何に存するのかを考えるために人間の真の機能は何かを問う。そして、理性を持って生きること (life of reason) が人間に唯一固有であるということを理由に、そうした生こそが人間の機能だと結論づけている。まずは彼の結論ではなく、この論証を批判的に検討しよう。もし人間に固有であることが重要であるのならば、なぜ人間の機能は、科学技術だとか、デズモンド・モリスが指摘するような性的ふるまいだと言ってはいけないのだろうか。あるいは自分と同じ種のメンバ

<sup>14</sup> Phaedrus 253-256. [邦訳 プラトン『パイドロス』、藤沢令夫訳、岩波書店、1967年。]

<sup>15</sup> *Nicomachean Ethics* I, 7. [邦訳 アリストテレス『ニコマコス倫理学』上下巻、光文社、2015年。]

一に対する並外れた無情さだということにならないのはなぜだろうか。このいずれの点においても、人間はユニークであるように思われる。だとすれば、[理性ある生という]この種差それ自体が人間の最良の特性でもあること、つまりそれが人類に特異な点であるだけでなく非常に優れた点でもあることは、また別に示されねばならないはずだ。しかし人類がもつ非常に優れた特徴が完全には人間に特有なものではなく、少なくともその一部の側面が他の種に共有されていることは、間違いなくア・プリオリに可能ではないだろうか。私が見るところ、動物たちはこのアリストテレスの論証において、明らかに悪いとわかる非合理的な行動を例示し、それとの対比によって理性の価値を際立たせるために用いられている。しかし、行動における「理性」の重要性に関して特定の立場から出発しないかぎり、この議論を受け入れる必要はない。人間同士について、われわれが冷酷な計算よりも衝動的な感情に基づく思いやりある行為を好むとき、その寛大な行為が動物の行為により近いという考えから、その好みを変えようとはしないだろう。また、そうすべきでもない。「理性」を要求することが良いものであるとすれば、その良さは人間の生の内部において正当化されねばならない。動物は常に邪悪であるという時おり言われるような考えが実際に正しいのでないかぎり、人間と動物の種差をことさらに強調することによって理性の要求が擁護されるわけではないのだ。

しかし、同様の形式の論証は、検討されないままに連綿と続けられてきた。そのひとつは、カントの初期の『倫理学講義』にみられる。そこでカントは、性行為について極めて鋭い意見をいくつも提示しているが、その過程において「性欲は、人間を獣たちと同等にする危険にさらすものだ」<sup>16</sup>と述べている。だが、どこにそんな危険があるというのだろうか。この苦言の背後にある論理は注目に値するものである。獣のようであることは、常に悪いとみなされているわけではない。身繕いや巣作り、子育てといった、誰もが高く評価する多くの習性を、われわれは獣たちと共有しているからだ。すると先の主張の要点は、獣たちが人間よりもずっと性交に時間と関心を注いでいるとか、ずっと性的に放縦であるということなのかもしれない。しかし、仮にそれが本当だったとしても、そのことから、獣たちがそうふるまうことが悪いと示されるわけではない。また、人間がそのふるまいを真似ることが悪いと示されるわけでもない。そうしたことが示されるためには、動物たちは常に悪いということ、あるいは人間は決して動物たちを真似るべきではないということが別に示されなくてはならないだろう。もっとも、それが困難であることは、「怠け者よ、アリのやり方を見て働け」や「蛇のように抜け目なく、鳩のように無害であれ」といった箴言を考えてみればわかる。また、多くの活動——た

---

<sup>16</sup> Kant, *Lectures on Ethics*, 'Duties towards the Body in respect of Sexual Impulse'.

たとえばバナナを食べること——について、「動物のようにふるまっている」という非難を受けた場合、「いや、私はまさに動物なので」と答えるのが適切である。したがって、特定の活動が人間にふさわしくないのはなぜかという理由は、やはり〔動物との比較とは〕独立に、人間の生の文脈のうちで与えられる必要がある。そうでないならば、こうした動物への言及は、民間倫理学<sup>ポピュラー</sup>において用いられがちな、劣等とされる集団を引き合いにした論証と同じ形式に従っていることになる。仮にこうした劣等される集団をゴンクと呼んでおくと、その論証は以下のようなものである。

ゴンクが行なういくつかの活動は忌まわしい。

この活動はゴンクが行なうものである。

それゆえ、この活動は忌まわしい。

この論証を真つ当なものにする唯一の方法は、正しい全称の大前提〔ゴンクが行なうすべての活動は忌まわしい〕をおくことであり、動物の場合、そうした前提があまり意識されずに受けいられていることが多い。たしかに、もし動物が行なうことはすべて邪悪ないし劣等だと前提するならば、その論証はいくらか力をもつだろう。こうしたとき、怪物的な「内なる獣」の悪徳が、現実の動物たちに投影されることになるのだ。

しかし実のところ、カントにこの論証はまったく必要ない。彼が性欲に見出している危険性は、彼の倫理学のより中心的な言葉によってもっとうまく表現することが可能であり、実際表現されてもいる。つまり、性欲に纏わる危険性というのは、人をモノのように扱ったり、人を尊重せずに扱ったり、人自身を目的とせず手段として使うことの危険性なのである。これらはよく理解できる概念だ。ところが、そうした議論の際においてもなお、人間（humanity）という観念は奇妙なものになっており、その奇妙さはまたしてもカントの動物に対する態度からもたらされている。カントによれば、人間が尊重されねばならないのは、理性をもつからであり、意識をもつからではない。しかしそうだとすると、精神異常者や老人、赤ん坊はどうなるのだろうか。カントは、人間であるものはみな尊重されるべきだという点を断固として譲らないが、彼にそう主張する道理があるのだろうか。動物は興味深いテストになる。動物たちはモノとして扱われてもよいだろうか。それとも、動物たちもそれ自体として目的になるものだろうか。カントによれば、動物は理性的でないがゆえにそれ自体として目的ではない。したがってわれわれは動物たちに対する義務を負わないし、われわれ自身の目的のために動物を手段として扱ってもよいとされる。もっとも、だからと言って動物に対して残酷なふるまいをしてもいいという訳ではないのだが、残酷であるべきでない理由は、残酷さがわれわれ自身の

本性の品位を落とすからである。つまり、そうした品位を落とすふるまいを避けるのは、われわれが自身に対して負う義務なのである<sup>17</sup>。しかし、なぜ残酷さが品位を落とすことになるのかについては、語られていない。だとすると、カントには、スピノザの場合と同様に、動物は意識をもつとしても人間の好きに扱える対象であり、人間の目的のために使ってもよい、と言うべきでない公式の理由はなさそうである。もし人間の目的が、動物に激しい苦痛を与えるが、他の点で重要なものである場合、スピノザの諸原理からそれに反対する主張を導くことはできず、私が理解するかぎりでは、カントからも導くことはできない。そうだとすれば、動物に苦痛を与えて楽しむことにも反対する理由はないように思われる。私は、単に彼らがこうした議論に弱い反論しか与えられないと言っているのではない。むしろ、私は彼らにとって反論することは意味をなさないと考えている。というのも、こうした〔人間の目的のために動物に苦痛を与えてもいいという〕見解は、まさに彼らに〔彼らの立場によって〕強いられるものだと思われるからだ。それは、デカルトが動物に意識はないと考えることを強いられたのと同様である。もし残酷さは一般的に悪いと考えるのであれば——カントは間違いなくそう考えていたわけだが——、動物に対して残酷にふるまうことが、人間に対して残酷にふるまうこととまったく別の理由で悪いと言うのは、筋が悪いだろう。

ここまでプラトン、アリストテレス、カントについて述べてきたことから、動物を悪の象徴として使うことは倫理学にとって何ら有益ではなく、それに基づいた論証が的外れであることが示されたのではないかと思う。では、そうした論証は的外れであるだけでなく、積極的に人を誤りに導くものでもあるだろうか。私はそうだと考える。そもそも、的外れであることがまさに誤りを招くものになる。われわれを間違った方向に進ませる働きがあるからだ。悪の源泉を自分の「動物的本性」という、変えられるはずがないもののなかに求めているかぎり、われわれは勝利するはずのない試合に没頭しつづけることになる。そして、自らの影から逃れようとする試みにエネルギーを費やすか、その難しさに意気消沈してすっかりあきらめてしまうしかない。この困難は、プラトン主義、ストア派、そしてそれらがキリスト教に与えた影響のうちに明らかに現れている。問題は、「動物的本性」についての考え方にある。すなわち、「動物的本性」が、単に特定の危険性を備えたものとしてではなく、完全に悪であるか少なくともまったくの混沌であり、助けとなる秩序の原理を一切もたないものと考えられていることである。そう考えてしまうと、「動物的本性」をそれ固有の原理に従って組織化しようとしたり、そうした原理がどんなものかを解明したりすることは意味をなさなくなる。秩序は、外か

---

<sup>17</sup> Ibid., 'Duties towards Animals and Spirits'.

ら「理性」あるいは「寛大さ (Grace)」によって課されなければならないというわけだ (これも見込みのない試みなのだが。混沌のうちにある動物がいったいなぜ寛大さや理性を気にかけるというのか)。しかしもちろん、以上のような動物的本性は、実在しない抽象物である。存在するあらゆる動物種は、それぞれ独自の本性をもつ。つまり、それぞれ独自の組織化された本能をもち、それはある意味では、独自の美德をもつということでもある。われわれ人間やオオカミのような社会的動物の場合には、本性的な愛着感情やコミュニケーション能力が備わっているはずである。また、武器の発明という進化的失態を犯してはいるものの、人間には孤独な生活ないし無政府的な生活よりも、社会的な生活の方がずっと合っていることは明らかだ。われわれが従事する最も興味深い職業のほぼすべては社会的な職業である。ルソーやホッブズの自然状態は、知性をもったクロコダイル——もしいるとすれば——にとっては良いかもしれないが、人間にとっては根拠のない幻想なのだ。

われわれが高い攻撃性を備えていることも、こうした考えに対する反証にはならない。自分の種のメンバーに攻撃性を発揮できる唯一の生物が、同時に愛着感情を備えているということは、ローレンツが指摘する非常に興味深い点のひとつである。自分の種のうちで一部のメンバーを仲間として識別するためには、同時に他のメンバーを敵として識別することが必要であるのかもしれない。非常に単純なレベルで考えれば、Aに対する愛を表現するために、ときにはBを攻撃するとか、少なくとも脅かすということが必要であるのだろう。こうした両義性はかなり昔から存在してきたのかもしれない。実際、ローレンツがまさに正しく主張するように、攻撃性はわれわれが価値をおいている多くの活動と直接結びついており、古い靴下のように簡単に捨て去ってしまえるものではない。攻撃性はわれわれの本性の一部なのだ。しかしこのことは、われわれが殺戮なしには生きられないということを意味するわけではない。われわれの本性は、プラトンやニーチェが言うような「無法の獣」ではないからだ。むしろわれわれの本性は、複雑で調和の取れた、言わば「他の獣たちの内にいる獣 (Beasts Within other Beasts)」のような構造をしており、[訳注 われわれが他の動物のうちの一員であり、さらにそうしたものとしてその種固有の動物的本性をもつという意味だと思われる]、さまざまな法則に従うものでもある。さらに、他の獣たちが角やトゲを発達させた一方、われわれは非常に有効な適応メカニズムである知性を発達させたために、われわれの本性は他の獣たちの本性よりもいくらか適応的である。闘いが面倒な場合、われわれはチェスをしたり、法に訴えたりすることができる。われわれ以外の「獣たちの内にいる獣」でさえこの点では見かけよりずっと適応的である。特に、「獣たちの内にいる獣」は、自分の欲しいものが手に入らないとき、代わりに別のものを受け入れる。血に飢えていても敵が捕まら

ないときには、その鬱憤を晴らすために、空気に向かって、あるいは木の破片や周りのものに対して攻撃の真似事をしたり、騒音を立てたり、普段は傷つけようとしない近くの者や通りがかりの者を追い払ったりする。これは「転嫁 (Redirection)」と呼ばれる行動である。あるいは、見たところ関係なさそうな別の活動に精力的に取り組む、「転位 (Displacement)」と呼ばれる行動をとることもある。こうした手段がなければ、現存する多くの生物はとっくの昔に失望で憔悴しきるか憤死していただろう。実際に欲しいものを手に入れるなど、この世界では極めて稀な経験のひとつだからだ。こうした〔転嫁や転位という〕手段が獣たちにとって可能であるならば、人にとっても可能であり、われわれは確かにそうしたことを常日頃から実践している。(たとえば、何かをいらいらと待っている人のふるまいはその最適な例だろう。)しかし、われわれの「内なる獣」が殺戮なしにはいられない——すなわち、殺戮の代わりに悪態をつくとか、磁器を割るとか、スカッシュをするとか、紙に何か書きつけるといったことでは収まらない——という考えは、空想上の自然史の話である。人間という種にとって転嫁と転位の限界がどこにあるのかは明らかでないが、それでもその限界がかなり広げられるということはわかっている。この点は、人類学者が「攻撃的でない文化」として挙げるいくつかの事例に見ることができる。たとえば、マーガレット・ミードが報告するアラペシュ族は、生活の大部分を敵の魔術に対する警戒に当てている<sup>18</sup>。また、ルース・ベネディクトによれば、ズニ・インディアンは、見たところあまり悪意のない魔術に従事しているのだが、それらは公に攻撃性をコントロールする手段や口実として使われている。これは、もともと攻撃的でないこととは大分違うことであるように思われる。「彼らの社会で、在職中の聖職者にとって、怒っているという疑いをかけられることは基本的な禁忌とされている。」<sup>19</sup> こうした雷を統制する仕方こそ、まさにローレンツがわれわれに学ばせたいと思っている類のものである。ローレンツは、そうした行動は転位行動として捉えることでよりよく理解でき、そこでは動物行動学の研究が、心理学研究と人類学研究に加えて有用になりうると提案するに留めている。しかし、この目的のためには次のことが絶対的に必要である。それは、われわれが自身の好戦的傾向を誠実に認め、日常的にだけでなく哲学者たちにも受けいれられてきた「特別な人間」の概念を修正することである。これまで描かれてきた「獣性」は、実際の「外の獣」にも「内なる獣」にも当てはまらないものなのだ。

ここまで、動物の生は、伝統的に語られてきたよりもずっと秩序立っており、しかも

---

<sup>18</sup> Margaret Mead, *Sex and Temperament in Three Cultures*.

<sup>19</sup> Ruth Benedict, *Patterns of Culture*, 76. [邦訳 ルース・ベネディクト『文化の型』、米山俊直訳、講談社、2008年。]

その秩序は人間の行動パターンがもつ秩序にずっと似ているということを述べてきた。しかしこの点は認められても、こうした秩序が「本能」に由来するということにどんな意味があるのかはまだ疑問に思われるだろう。当然ながら、この言葉を人に対して適用する前に、その点を明らかにしておかねばならない。

ここで非常に有用となるのは、「閉じた本能」と「開いた本能」という用語である。閉じた本能とは、たとえばミツバチのダンスや一部の鳥の歌、ハタオリドリの巣作りのパターンのように、隅々まできっちりと遺伝的に決定されているふるまいである。この閉じた本能の場合、その種の他のメンバーから隔離され、有用な条件づけをされないよう注意深く育てられた個体からも、細部にわたって正確に同じ複雑なパターンが生み出される。ここで重要な働きを担っているのは、知性ではなく遺伝的プログラミングであり、パターンを身につけることは単に成長することにすぎない。他方、開いた本能とは、狩りや木登り、洗濯、歌唱、子育て、といった特定の種類のふるまいをする大雑把な傾向のことである。たとえば、ネコは自然的に狩りをする傾向があり、その傾向は周りに手本がないときですらみられる。ネコは食べ物のいらぬ子供のと時から狩りをするし、十分に餌が与えられている状態ですら狩りをし続ける。狩りは、単に目的のための手段ではないのである。しかし、ネコの狩りの仕方には型にはまった単一のパターンがあるわけなく、その動きの幅は広範囲に渡る。一匹のネコは、一生の間に、新しい動きを考案したり、他のネコたちからコツを学んだりして、非常に多様な選択ができるようになる。この意味で、狩りは学習されるものである。生まれか育ちかという二項対立は、ここではまったく間違いであり、役に立たない。狩りは、高等動物の大部分の活動がそうであるように、生得的でありかつ学習されるものでもある。ネコは、特定の能力およびその能力を使おうとする強い願望をもって生まれるが、その能力をうまく伸ばすためには、時間と練習、そして（多くの場合において）手本が必要である。また、ネコは、他の能力や願望はもっていないため、そうした能力を獲得することに困難を覚えるだろう。たとえば、泳ぎは、ネコやサルがもつ通常的能力の範囲には入っていない。その高い敏捷性にも関わらず、ネコやサルは、人間やカバほど泳ぎに適していないのだ。したがって、手本となるものも通常は水には入らないし、もし食べ物が水の向こうに置かれたら、彼らは餓死してしまうかもしれない。

この種の開かれた本能は、高等動物たちの標準装備である。オオカミの社会生活をあれほどうまくいかせている複雑なふるまいすべての原因は、これらの開かれた本能に求められるべきである。モノガミー、きれい好き、子育て、無力な者を攻撃しないといったオオカミたちのふるまいのパターンは、緩やかではあるがもともと備わったものなのだ。ただし明らかに、開かれた本能と閉じた本能は、まったく別の種類のものというわ

けではない。両者は、程度差のあるスケールの両極端である。たとえば、鳥には決まった歌い方のパターンをもつものだけでなく、さまざまな模倣の能力をもつものがある。マネシツグミは、他の鳥の歌やそれ以外の雑音をも模倣することができる。マネシツグミの〔歌唱能力の〕プログラミングは、カッコーのプログラミングより明らかに複雑であり、そこには何らかの自分で選択する力も含まれているにちがいない。けれども、模倣の能力それ自体は、たしかに彼らの本能である。マネシツグミは、訓練されなくても模倣するだろうし、また模倣の代わりに作曲を学ぶことはできないだろう。高等動物たちの巣作りも同様である。彼らの巣作りにはハタオリドリのような決まった型はないが、彼らは何かしら巣をもつだろうし、巣を作る材料が何もない場合でもそれなしでできるだけのことをしようとするだろう<sup>20</sup>。

ネズミは、〔巣作りの材料がないときにも〕自分の尻尾を隅っこに運んできては、適切な材料があるときに行なう特有の動きをする。このように、〔本能には〕定形的なふるまいを生み出すものとかなり一般的な傾向性にとどまるものが存在し、両者の間は連続的である。狭い方の極限を考えるならば、完全に閉じた本能はありえないと言いうるかもしれない。ハタオリドリですら、枝と使える材料によって、少しはやり方を変えるはずだし、ダンスするミツバチですら、自分の消化状態にやり方を合わせるだろう。では反対に広い方の極限を考えた場合、何とすることになるだろうか。そうした極限的な「開かれた本能」という概念は、人間に適用したとき意味をなすだろうか。あるいは、あまりに開かれた本能の概念は、もはや空虚なものになってしまうだろうか。

行動主義者たちが人間は本能をもたないと言うとき、彼らは常に閉じた本能のことを意味している。彼らが指摘するのは、人間が規格化された蜘蛛の巣を作ったり、規格化されたミツバチのダンスを踊ったりしないことであり、そこでは人間が常に持ってきた動機のパターンは無視されている。なぜ人は家族を形成するのか。なぜ人は自分の家を気かけ、境界を争うのか。なぜ人は財産をもつのか。なぜ人は賭け事や自慢、自己顕示をし、おしゃれに着飾ったり、未知のものを恐れたりするのか。なぜ人はこんなにも物を語ったり、踊ったり、歌ったりするのか。なぜ子どもは——ついでに言えば大人も——遊ぶのか。なぜ誰もプラトンの「国家」に住んでいないのか。行動主義に従えば、これらの答えは、文化的に条件づけられているからである。ではそうであるならば、(問い1) 誰がそれを始めたのだろうか。この問いに対する行動主義の答えは、引力を説明しようとして、物が落下するのは、とにかく何か別のものがそれを押したからだと言うようなものである。この答えは仮に正しいとしても、問いに答える助けにはならない。

---

<sup>20</sup> W. H. Thorpe, introduction to Lorenz's *King Solomon's Ring*.

さらに、(問い2) なぜ人は自分の家族にすら刃向かうのだろうか。なぜ人は、それをしないようにと誰もが文化的に条件づけられることをやってしまうのだろうか。まともな行動主義者でこの問いに答えた人に会ったことはないが、おそらくはサブカルチャーや文化的両義性、あるいは、スケープゴートや何やらの社会的必要性によって説明されるのだろう。愉快な見解である。いったいどうやって十八ヶ月の子どもたち全員が、いまやサブカルチャーに参加すべきときが来た——つまり、家具にのぼったり、家の外によちよち歩いて行ったり、火遊びをしたり、窓を割ったり、物を粉々にしたり、泥をこねくり回したり、アヒルを追いかけてたりし始めるときが来た——という噂話を回し合うのだろうか。なにしろ、これらはあらゆる健康な子どもたちが、条件づけられていないばかりか阻止されるにも関わらずほぼ確実に行なうはずであるような、かなりお決まりの事柄である。だからこそチョムスキーはスキナーに、小さな子どもが会話のなかで独自の文法的間違いを犯す——訂正されるまで気づかずに、それまで一度も聞いたことがないような仕方で話す——ということがどうやって起こりうるのか、を問うたのだ。そうした問いに対処しようとするとき、行動主義者の両手はア・プリオリな前提に縛られているために身動きができない。他方で、動物行動学者は経験的なやり方をとることができる。これこそが私が動物行動学者を好むべきだと思う理由である。動物行動学者は、研究対象の生物種のうちに何らかの活動を見いだしたとき、それを何か別のものとみなす理由を探したりせず、写真や撮ったり記録をつけたりする。動物行動学者はそれを所与とみなし、その文脈の詳細な観察や他の活動との比較をもとに、当該の活動と他の所与とされた物事との関係を説明することへと徐々に移行する。(例えば次のように。セグロカモメたち<sup>21</sup>は、縄張りの境界線上で出会うと、常に脇によけ芝をむしる。これは巣作りに似たふるまいだが、カモメたちはその芝を使うことはない。そうではなく、彼らは通常闘いのときに行なわれる別のふるまいのパターンに従っているのであり、時には実際闘うこともある。動物行動学者は、こうしたセグロカモメの行動のすべてを徹底的に調べ、また他の状況で彼らがとる行動と比較を行なったうえで、当該の活動が「転位攻撃」である——芝に怒りをぶつけているのだ——という仮説を立てる。ただし、他の転位活動と注意深く比較し、転位攻撃であることの意味や、その生理学的含意をしっかりと分析するまで、この仮説が受けいれられることはない。) 動物行動学者は、唯一の万能な説明を仮定したりしないのだ。この点こそ、「人間本性」という言葉を使ってきた多くの先人たちより、動物行動学者が優れているところである。これまで使われてきた「人間本性」が信用ならないのは、人間は「根本的に性的」であるとか、「根本的に

<sup>21</sup> N. Tinbergen, *The Herring Gull's World*, 1953, 68. [邦訳 ニコラース・ティンバーゲン『セグロカモメの世界』、安倍直哉・斎藤隆史訳、思索社、1975年。]

利己的ないし貪欲」であるとか、「根本的に邪悪」または「根本的に善」であるといった過度に包括的な説によって、まさに万能な説明を与えるからである。そうした説は、素朴で単純な人が上昇湿気〔訳注 地面から上昇して建物の壁に入り込む湿気〕の解明に近づくのと同程度にしか人間の行動の解明に近づくことはない。素朴な人は、湿気の上昇のひとつの源泉だけを、つまり水が入ってくる特定の場所だけを見つけようとする。こうしたアプローチの仕方をとってしまうと、理論家は自分の専門領域を離れるやいなや驚くほど歪んだ見解をもつことになる——マルクス主義的芸術理論やフロイト的な政治解釈を見ればわかるだろう。湿気の動きを逆にたどってただ一つのありうる源泉に至ろうとすることは、運動法則に抵抗することに等しい。他方、動物行動学者は、人間本性が根本的に何であるかを言おうとしない。動物行動学者が明らかにしようするのは、むしろ人間本性が何に存するのだからである。（ロバート・アードレイでさえ、人間が根本的に縄張り意識をもつとは言っていない。）それゆえ、また水力学の喩えを用いるとすれば、動物行動学者の取り組みは、川の流域を地図にする測量技師のようなものである。彼らは、水源地がここだ、あそこだと記録し、そしてそのうちの一部が合流する傾向をもつことを見出すのである（たとえば、あるネコが狩りのために木登りをし、求愛のためにニャーニャー鳴くことを記録する）。動物行動学者は、見たところその生物の他の習性につながりもたない、独立した活動を見つけると、何らかのつながりが現れるまでひたすら情報を集積する。その結果、たとえばレミングの「自殺」は、単独で生じる奇怪な衝動などではなく、非常に複雑な移動パターンの一部であることが判明している。（レミングは泳ぎが得意で、しばしば川を渡ったり島にたどり着いたりする。彼らが溺死してしまうのは、過密に耐えられないからである。過密は、彼らをあらゆる種類の絶望的な逃避行動へと駆り立てるのだ<sup>22</sup>。）同様に、芝をむしるセグロカモメを動かしているのは、単独で生じる奇怪な「破壊」衝動などではなく、恐れと攻撃という二つの動機パターンの相互作用によるものである。この二つのパターンは、単作りの場面での彼らのあり方と決まった仕方で結びついており、その種のもの一般的な特徴を示すものとしておおよそ理解することができる。ある習性を理解するということは、それに何が結びついているかを見てとることなのである。意味は使用なのだ。ここで前提されているのはただひとつ、有機体には何らかのシステムがあるはずだということ、つまりどんなにありふれた植物や動物の習性にも何らかの目的があるはずだということだけである。そして、この前提はそうした説明がうまくいくことによってのみ正当化される。

---

<sup>22</sup> W. Marsden, *The Lemming Year*; W. Elton, *Voles, Mice and Lemmings*. を参照のこと。

したがって、「生物種の本性」は、一定の能力や傾向性に存しており、それは、子孫に受け継がれるとともにかなり強固な特徴的パターンを形成するものである——ただし生まれた後の条件によってその詳細は相当に変化する。この意味で、ヒヒたちは「本性的に階級的な動物」である。ヒヒたちはまさに長老制と呼ぶべき形態のもと、リーダーを立てて群れで移動し、一番下の赤ちゃんヒヒに至るまで細かく階級づけられた序列関係に従って行動するからだ。ヒヒが本性的に階級的であることは、彼らの階級制度が必ずしも野蛮な「上下関係」でないとか、ヒヒの種や条件によって階級制度の詳細は非常に大きく異なる<sup>23</sup>ことを示すことで「反証」されるわけではない。むしろそうした細部を研究することは、本性的な階級制傾向という考えを強化し、明確化するにすぎない。また、無礼なヒヒや威厳のないヒヒがたまに見つかっても、この反証にはならない。毛のないヒヒがごく一部いるとしても、ヒヒが「本性的に」毛をもつことが反証されるわけではないのだ。さて、こうしたアナロジーを念頭において、例の流行りの問いに向かおう。すなわち、人間は本性的に攻撃的なのだろうかという問いである。まず、人間が本性的に攻撃的であるとはどういう意味だろうか。いまや明らかであるように、動物行動学者にとって人間が本性的に攻撃的であることは、人間が「根本的に攻撃的」である——つまり、攻撃性が人間の行動を促す唯一圧倒的な動機である——ことを意味しない。それが意味するのは、人間は他の動物のなかでも特に攻撃的であることである。つまり、誰かに教えられることもなく、別の目的のための手段として必要なわけでもなく、挑発——これは、他に目的がある場合には適切でありうるものだが——を必ずしも受けていないにもかかわらず、自分の種以外のメンバーを時おり攻撃する傾向が、人間が本性的にもつ一連の傾向のなかに含まれているということである。これは、これまで強く否定されてきたことだ。しかし、いまや人間についての研究は、動物行動学者によって、他の生物種の場合と同じように進められなければならない。つまり、最初に人間のふるまいを偏りのない目で眺め、それからさまざまな原因や関係を探し求める作業が必要である。この作業は、動物行動学者が人間でなく、人間の観察者としてやって来た別の生物種の者であるとき、最も簡単なはずである。そこで、アルファ・ケンタウリから来た動物行動学者を考えることにしよう。彼をケンタウロスと呼んでおく。ケンタウロスは、ホモ・サピエンスについての百年に渡る観察結果を手に行っているものとする。ケンタウロスが衝撃を受けたことのひとつは、この生物がしばしば自身の種のメンバーを故意に殺したり傷つけたりすることである。もちろん四六時中というわけではないにせよ、その頻度はこの惑星の他の生物たちに比べて飛び抜けて高い。ケンタウロスがもっている正

<sup>23</sup> 階級制度の多様性については次をみよ。“Variations in the Social Organization of Primates,” in D. Morris (ed.), *Primate Ethology*.

式な記録には、百年戦争、七年戦争、三十年戦争等々、並びにアルメニア人虐殺、儀礼的殺人、カニバリズム、死刑、拷問、迫害、大量殺戮が綴られている一方、他の生物種についてはそうした記録はない。こうしたことが、人間という種にみられる他のさまざまな識別的特徴と同じくらい突出していると感じたケンタウロスは、人間の社会学者（特定個人への攻撃にならないように、仮にジョーンズ<sup>24</sup>と名付けておく）に説明を求めた。その対話は以下のように進む。

ジョーンズ：全部文化的条件づけの結果なのですよ。

ケンタウロス：ええと、どういうことですかね。

ジョーンズ：人は親たちにそう教えられたからそう行動しているだけなんです。

ケンタウロス：人は常に親に教えられたことをしているのですか。

ジョーンズ：親がそうさせるべきだと強く確信しているときにはそうですね。

ケンタウロス：では、そもそもなぜ親たちは暴力が必要だとそんなに強く確信しているんですかね。

ジョーンズ：自分の利益のために戦争を起こす悪い統治者にだまされているんです。現代の洗脳技術を使えばとても簡単ですからね。

ケンタウロス：そうだとしたら、殺戮は、文化的に押し付けられた活動にみられるような特徴を全部もっているはずですよ。たとえば、信心深くない人たちの教会通いのように、漫然として、しきたりに縛られた、気の乗らない活動になるはずではないですか。また、あなたが現代の技術について言っていることに従うなら、殺戮は記録にあるよりもずっと最近の発明だということになりませんか。殺戮は、ただ生計を立て、権威を満足させるために、あくびまじりで行なわれているのでしょうか。あるいは、もっと魅力的なものと結び付けられて、楽しいものであるかのような見かけを与えられる必要があるのでしょうか。何か妨害が入ればすぐに取りやめられるようなもので、若者より老人に広く受け入れられているものだというのでしょうか。そうだとするならば、こうした点が明らかにされているような、様々な種類の虐殺の映像や記録を見せていただきたいものです。

以上が、対話が進みうるひとつの方向である。もうひとつは次だ。ジョーンズは、文化的条件づけを持ち出す代わりに、暴力は欲求不満によるものだと答える。つまり、人

---

<sup>24</sup> ジョーンズ流の議論は、たとえば論文集 *Man and Aggression*, ed. Ashley Montague, OUP 1968 に所収された著名な反動物行動学者たちの著作や、アシュリー・モンタギュー自身の著作の至るところで見つけることができるだろう。

間はもし欲求不満にならないければ決して攻撃性を発揮しないというわけである。

ケンタウロス：ところで、人間は欲求不満に陥らない暮らしをしたことがあるのですか。

第一の選択肢

ジョーンズ：(きっぱりと) ありませんね。そんな暮らしは不可能です。

ケンタウロス：そうだとしたら、人間がそうした暮らしをしたときに何をするかが、どうしてわかるのでしょうか。

ジョーンズ：本性的なものは良いものであり、攻撃性は悪いものだからです。

ケンタウロス：しかし、生物種には、ときどき自分にとって悪い習性をもつ本性的傾向がありますよね。ギガンテウスオオツノジカやセイラン、あるいはおそらく恐竜たちについてあなたがたが記録していることからわかるでしょう。気候が変わったり生物種が新しく武器を発明したりすると、環境が変化して行動選択のメカニズムが誤りやすくなり、一部の特徴が異常発達したり適応的でなくなったりするものです。

ジョーンズ：あなたは人間の尊厳をよく理解しておられないようだ。人間はそんな墮落したものではありませんよ。

ケンタウロス：これは失礼しました。人間が欲求不満でなかったらどうなるのかという問いは置いておくほうが良さそうですね。では逆に、欲求不満であるときの人間の反応もまた、彼の本性の一部ではないのでしょうか。他の生物種は、転位行動を十分に活用しています。カモメは芝をむしり、オオカミは吠え、ゴリラはうなり、イトヨは逆さまになって砂を掘る。そうすることで、実際の殺戮はだいたいの場合に回避されている。ところが、人間も同じように転位行動をもっているにも関わらず(そのこと自体が攻撃的な願望をもつ証拠だと思われるのですが)、それだけでは殺戮に至るのを防げていない。これは、いったいどういう訳なのでしょうか。

第二の選択肢

ジョーンズ：たしかに、欲求不満から逃れられる人間はほとんどいません。けれどもそれは、ほぼあらゆる親や教師が犯す間違いによって、ほとんどの人が人生の初期段階で歪められてしまうせいなのです。

ケンタウロス：だとすれば、そうした間違いを犯しがちなことや、その間違いによって簡単に歪められてしまうことは、外から降りかかってくる偶然的出来事ではなく、人間という種の本性の一部なのではありませんか。あと、攻撃性が発揮されない例外的な事例についてもっと教えてください。そういう場合には、人間は自分が得られないものを決して欲しがることはないのでしょうか。その欲求不満は、攻撃的ふるまいを決して引

き起こすことはないのでしょうか。

ジョーンズ：おそらくそうでしょうね。そうすると〔実際にはそういう状況になっていないので〕、今言ったような教育上の間違いは、本性的ではないけれども、常にある程度起こってしまっているということなのでしょう。

ケンタウロス：その間違いが本性的でないと言うことと、本性的であると言うことの違いが何かあるのでしょうか。あなたは何らかの教育手法を使ってその誤りをチェックし続けることを推奨するでしょう。ただ、このときもちろんあなたには、その教育手法それ自体も人間にとって非本性的なものだなどと考える必要はありませんよね。すると結局あなたがしているのは、人間の本性のある一部を使って、別の一部をコントロールするということなのです。たとえば、危険を冒そうとする子どもの本性的な傾向をどうにかするために、本性的な用心深さを育てるように。これこそが教育の仕組みというやつでしょう。実際、教育が可能なあらゆる生物種は複雑なものですしね。もしケンタウロスの問題の話に脱線してよければ・・・

私が思うに、社会学者たちがこうした場合に本当に守ろうとしているのは、人間の本性は善であり、しかも全面的に善であるので、もし殺戮が悪いものならば、その原因は人間本性以外のものであるにちがいないという考えだろう。この見解は、人間本性などというものは存在しないという〔行動主義の〕公式声明とはかなり異なっている。たとえば、ローレンツに対する非常に激しい批判者の一人であるアシュレー・モンタギューは、人間は本能をもたないと主張するとともに、人間は「本性的ニーズ」<sup>25</sup>——その最も重要なものは愛だ——と呼ばれるものからなる複雑なシステムをもつということも主張している。モンタギューによれば、人間は、本性的に善いものだけを欲する。あらゆる種類の物理的戦闘を含むすべての悪は、人間にとって異質であり、外からもちこまれるものである。ただし、人間には「(神に) 誓う (swear) という本性的ニーズ」がある。誓うことは健全で正常な行為であるが、文明が墮落した状況ではそれが屈折して物理的な暴力になりうるというわけだ〔訳注 “swear”は、もともと神に誓うという意味をもつが、神に関わる言葉 (“Jesus”など) が罵りに使われることがあるために、「罵る」「悪態をつく」といった意味をもつようになった。ここではそれが文明の墮落に結び付けられている〕。

このような議論が、本能それ自体に対する批判と整合しないことは明白である。さらに、こうした主張は(しばしば罪を犯した者を寛大に扱う言い訳を与えるのに役立つ

---

<sup>25</sup> A. Montague, *Man in Process*, e.g. 161, and *The Anatomy of Swearing*.

きたが)、よく考えてみれば空虚である。そもそも悪はいったいどこから来るとい  
のか。罪を犯した本人ではなく、社会のせいだと言うことは、人類の一部から別の一部へ  
と責任を移動させているにすぎない。もし悪を欲する人間はひとりもないと言うなら  
ば、誰がそれを始めたのだろうか。ルソーは、その若書きの著作のなかで、唯一可能な  
答えを与えている<sup>26</sup>。ルソーによれば、悪は人々が集まることによって生じる（地獄と  
は他人のことだというわけだ）。人々が孤立していた間は、すべてがうまく行っていた  
のであり、それが人間の本性的〔自然〕状態であった。本性的な状態にある人間には、  
「決まった家はなく、他人は必要ない。同じ人に二度会っても、互いのことを知り合う  
ことも、話をすることもなかった」。その段階を脱して、言葉を発明したときこそ、「社  
会」が生まれ、それと共に悪が生まれたというのである。さて実際のところ、ルソーが  
与えるこうした「純粋な個人」の描像は、霊長類に典型的なふるまいとほぼ鏡のように  
正反対である。霊長類たちは、ほとんどすべての生活を集団の中で送る。人生のなかで  
集団を離れるのはおそらく二回だけだろう。彼らは互いを常に必要とし、互いを親密に  
知り合い、四六時中コミュニケーションをとっている（「一匹でいるチンパンジーはチ  
ンパンジーではない」）。ある意味では、定住地をもつとさえも言える。チンパンジーた  
ちはふらつき回るが、決まった範囲からは出ない。そして、季節ごとになじみの場所に  
戻る。人間が言葉と知性を進化させてきたのはこうした種類の環境においてである。個  
で生活する種にそうしたことはできなかつただろう。ルソーは、実際この点に困難を見  
出していた。そこで彼が提案した答えは、めったに起こらない何らかの自然災害があっ  
て、人々は互いに助けを求めようになった、というものだ。なるほど、すると、それ  
まで言葉をもっていなかった年長者たちが会議に集められ、議長がいまや言語を発明す  
る時だという提議を出したというわけだ……。しかしダーウィン以来、こんなことは  
言えなくなった。社会は人間がともかくも生きていく条件——本性的に生きるための条  
件であるのは言うまでもなく——であり、そしてどんな社会にも何らかの悪が（少なく  
とも軋轢が）存在するので、悪もまたある意味では人間にとって本性的である。人間は、  
他のあらゆる生物種と同様に、その種独自の本性的な悪をもつのである。人間の本性が  
全面的に善ではないとすればそれは（全面的に）悪であるという、白か黒かの見方にこ  
だわらなければ、この点を理解することは難しくない。とはいえ、そうした極端な考え  
は道徳主義者たちの間で常に人気を集めてきたものである。

スクウェアは、人間本性はあらゆる美德の完成形であり、悪徳は身体奇形と同様

<sup>26</sup> J. J. Rousseau, *Discours de l'Inégalité*. [邦訳 ジャン＝ジャック・ルソー、『人間不平等起源論』中山元訳、光文社古典新訳文庫、2008年。]

に本性から逸脱したものだと考えた。スワッカムは反対に、人間の心は「墜落」以来、「天恵」によって浄化され、贖われぬかぎり、悪の巣窟そのものだと主張した。

(Fielding, *Tom Jones* [邦訳 ヘンリー・フィールディング、『トム・ジョウンズ』、朱牟田夏雄訳、岩波書店、1975年])

後者の見解はとりわけ奇妙なものだが、多くの不正を正当化するために用いられてきた。しかし、なぜどちらかを選ばなければならないのだろうか。むしろ、人間の本性、つまりその本来的な成り立ちは、善または悪としてではなく、われわれの選択に委ねられるただの原材料として捉える方が理にかなっているように思われる。人は、その本性をどうするか次第で善くも悪くもなれるのだ。

ともあれ、以上が動物行動学者の観点である。虐殺の慣習を突きつけられたとき、動物行動学者は非難するだけして匙を投げてしまうことはない。動物行動学者は、レミングについて行なったのと同じように対処する。つまり、そこに関係するすべての行動のパターンを調べて、背景的文脈を理解しようとするのである。たとえばローレンツが最初に指摘するのは、虐殺は、人間の本性のうちの最も大事な要素の一部——忠誠と友情——と結びついていることが多いという点である。人は多くの場合、自分の友人や家族を守るために殺害を行なう。人間がもつ好戦的態度は、しばしば愛情の一側面なのだ。そしてこの態度は、相手を友人として見るようになると消失する。また、社会のなかだけではなく、人間の本性のうちには、虐殺に逆らうようなさまざまな傾向がある。秩序を求めることも本性的であるし、流血に対する恐怖も本性的である。この問題に関しては、われわれは社会からの命令を待つまでもなく、自身のうちに葛藤を抱えているのだ。むしろもしそうでなかったならば、社会は存在しえなかつたろう。

次に見なければならぬのは、少し穏便な形の暴力、つまり文明化された社会のなかでの攻撃性である。ローレンツはここで、攻撃性がもつ価値に強い関心を向けている。たとえば、好戦的傾向は懸命な努力と結びつくものである。また、真理のためにあるいは弱者を守るために「飽くことなく闘う」人や、改革のための闘いや悪一般に対する闘いのうちにも、攻撃性の価値を見出すことができる。もちろん、彼が述べていることは、単に研究すべき分野があることを示唆するものにすぎない。それでも、その考えによって、アーサー・ケストラーのように攻撃性を「病気」とみなす人々をわれわれが非常に警戒すべきであることがわかるだろう。ケストラーのような人々は、この「病気」を薬物等によって化学的に治療すべきだと主張するが、そんな治療が試みられたときに、人

間の生にどれだけのものが残されるのかわかったものではないのだ。<sup>27</sup>

さて、ここまで、人間が本性をもつと言うこと、さらには本能をもつと言うことが、極めてまともな考えであるということを主張してきた。では、このことは哲学者にとってなぜ重要なのだろうか。倫理学に対する帰結は非常に明らかだが、それについてはすぐ後で述べる。先により一般的な点について言えば、このことは心の哲学で扱われるさまざまな問題にも影響を及ぼすと思われる。

伝統的に、人間を他から区別する特徴であり、人間固有の美点でもであるとされてきたのは「合理性 (Rationality)」である。とはいえ、これはなかなかやっかいな概念である。合理性は「知性」と同じではない。まったく合理的でない事柄を追求する際に高い知性を発揮することも可能だからだ。「合理的」であることは、手段だけでなく目的にも関わるものである。「正気 (sane)」という言葉ともそれほど遠くない。だが「知性的」も、目的に関係し、単なる思考の一貫性以上のことを示すために使われる場合がある。もし万物の破壊や可能な限りの大きな混乱を目論む人がいたら、それが整合的であるとしても、その人は正気でないとか非合理的だとか言われるし、さらには愚かだとさえ言われてしまうだろう。けれども、おそらくコンピュータにプログラミングすることで、こうしたことを目指させることはできる。なぜだろうか。それは、「合理性」概念が他のあらゆる実践的な概念と同様、特定のニーズをもった特定の生物種に関する語彙の一部であるからだ。実存主義者は、完全な自由について語る際、まるでわれわれに空間的制限を超越して至るところに遍在しろと言う人と同じくらい無茶なことを述べている。われわれは、身体をもたない知性的存在として、可能な肉体のあり方を試しに考察しているわけではない。われわれはすでに、非常に特定の、はっきりと限定されたニーズや可能性をもってしまっている——もちろんこの制限の代償として、些細なものではあるけれども、そのニーズが満たされる充足感が現実のものであるという利点もあるわけだが。こうした存在者にとって、合理的なあり方の可能性は、非常に狭く限定されている。必ずしも個別の欲求の可能性が制限されるわけではないが、そうした欲求が組み込まれる行動指針や、生の枠組みは制限されているのである。(たとえばボビー・フィッシャーは、チェス以外のことを一切しないことを選択する際、人間には不可能な行動指針に従うことを試みているように見える——それはチェスがわれわれのほぼすべての活動と同様に、外からの協力だけでなく、その活動の内での協力が必要であるという理由だけからも不可能なのだ。同じことは、まったく孤立した宗教を試みる極端な禁欲主義者や、洗淨強迫についても言える。) 特定の生物種にとって、あらゆる生の形式が意味を

---

<sup>27</sup> 両義性に関するこの立場についてより完全でよりバランスのとれた見解は、Eibl-Eibesfeldt, *Love and Hate*を参照のこと。

なすわけではない。われわれの自由は消極的なものである。われわれは、自分の本性的な美德や利害関心を捨てることはできても、新たに別の美德や利害関心を獲得することはできないのである。たとえカントのように、人間に与えられた特定の仕組みを偶然的な事柄として扱うとしても、(カントがよく認識していたように<sup>28</sup>) やはり何らかのニーズの体系、あるいは身体を特定の生物種の身体たらしめるような特定の仕組みの存在は認めなければならない。〔われわれの生の形式に〕援助、害、妨害、抑圧、欺きとみなされるようなものは常に成立しているはずなのだ。(なお、この点に関して、神や他の霊的存在の扱いは常に問題となってきた。というのも、そうした存在がニーズをもつということは奇妙に感じられるが、一方で彼らの選好がまったく恣意的だと言うのもさらに奇妙だと思われるからだ。とはいえ、この頭痛のたねは神学者たちに任せておこう。)

では最後に、倫理学に戻ろう。もし以上のすべてが正しければ、ムーアが不可能だと断定したようなことが導かれる。すなわち、われわれの本性に関する事実は、道徳的帰結をもちうるということである。文化の複雑性はあるにせよ、人間のような生き物にとって、善または悪、正または不正とはっきり言えるものには制限があるのだ<sup>29</sup>。そうした点〔何が善で何が悪か等〕についての主張は、根拠のない直観や、私的な感情、説明できない決めつけに基づくものにはならない。そうした主張は、事実に直接的に基づくのであり、なかでもそこで大きな役割を果たすのが動物行動学的な事実である。ここで、現状の知識のもとでもそうした身分をもつと言えそうなものとして、二つの価値判断を挙げておこう。ひとつは、過密状態は悪だという判断である。人間と動物どちらの行動の観察においても、たとえ物質的ニーズが満たされている状況でも、個体が対処できる数には限界があることが示されている。しかし行動主義者の見解では、これが正しいことはありえない。もしわれわれが教育によって作られた生き物であるならば、必要とされるべきなのは可能なかぎり密集した環境で人々を育てることである。いったんそのように教育されてしまえば、密集は人にとって少しも害にならないはずなのだ。それゆえ、現実の条件下で過密状態に対して人々が示す反応についての事実は、道徳的判断とは無関係だということになる。他の過密状態におかれた動物たちについての事実も同様だ。けれども、われわれはそうした事実を無関係だと考えているだろうか。もしそう考えていないのなら、社会学者や道徳哲学者の脅しに従って、先の論証を無根拠だと考えてはならない。〔価値判断の〕第二の例は、家族に関わるものである。この場合もまた細部は文化ごとに非常に異なるが、家族を形成し、その中で子供を育てることが人間の本

<sup>28</sup> たとえば、人間を聖なる意志から区別する際、カントは道徳という語が前者にのみ適用され、それゆえ一連の主観的制限のもとでのみ意味をなすと説明している。

<sup>29</sup> Cf. Geoffrey Warnock, *Contemporary Moral Philosophy*, 66. 私はそこでの意見に完全に同意する。

性であるということは、明らかに十分な証拠によって示されている。この本性は、オオカミやゴリラにも共有されるようなものであり、他方で母親一人が子供を育てるクロコダイルやハムスター、ホッキョクグマとはまったく異なるものである。家族を形成できることは人間のニーズであり、そうした家族のなかで育てられることは人間の子供のニーズである。それゆえ、人間からその機会を奪うことは間違いなのだ。これらの点に基づいて私は次のような道徳的判断を下す。それは、プラトンの『国家』で提案されている家族についての協定〔妻子の公有化〕は間違っているという判断と、家族生活が不可能になる状況に人々を生きさせる南アフリカ政府は間違っているという判断である。こうした事実（そこには、施設に入れられた赤ん坊の人生を追跡したボウルビィ〔ジョン・ボウルビィ。イギリスの医学者・精神分析家〕の調査なども含まれる）は、単にたまたま私にこの道徳的判断を下させた原因ではなく、この判断の根拠である。これに対し、行動主義者に従うならば、人々が家族を形成するのはそうするよう教え込まれてきたからにすぎないと言うことになるだろう。その場合、プラトンや南アフリカ政府が、なるほど、ならば人々に別の生き方を教えこめばよいだけだ、と言う余地は完全に開かれている。さて、私はここで、古くからある、普遍的で、完全に本性的な推論形式をもつ二つの事例を挙げた——これらは近年さまざまな角度から理論的な批判を受けてきたものでも。もちろん、人類学と社会学によって、この推論はより複雑なものになるにちがいないが、それが無効になることはありえない。本稿で述べてきたことによって、こうした推論が今日の諸問題に密接に関係しているということが十分に示されていることを願う。実際、変化のペースが速くなるほど、人間の本性が何に耐えられると期待できるかについて何らかの考えをもつことは急務となる。こうした考え方を気に入るならば、過去の哲学者たちのなかでも、人間本性という言葉を使って語ってきた人々、悪名高きアリストテレスやバトラー〔ジョセフ・バトラー。イギリスの神学者・哲学者〕に耳を傾けようと思うだろう——彼らは「自然主義者」であるという疑いによって、過去五〇年間あまり顧みられてこなかった、哲学の殿堂におけるやっかいな偉人たちである。

最後に言うべきだが、当然ながら、私は人間の本性に関係するすべての事実が動物行動学者によって明らかにされると思っているわけではない。動物行動学と同じように道徳哲学に関係するその他の分野も、かなり類似のタブーに虐げられてきた。もちろん、そうした学問分野は道徳という主題にとって代わるものとして考えられるべきではないが、すべては深く関連しているのだ。歴史や神経科学、そしてあらゆる社会科学が必要とされていることは間違いない。人間にとって何が良いのかを知りたいならば、人間に可能な選択肢は何であるのか、各選択肢のためにおおよそどれくらいの対価を払わなければならないのかを知らねばならない。しかし、そうした研究のなかでも、おそ

らく動物行動学に対する抵抗は特に強く、そして不合理なものであった。ローレンツが指摘するように、人間のプライドは、ダーウィンとフロイトによってすでに二回の不快な打撃を受けている。三回目に耐えてホモ・サピエンスが単に動物たちにある程度の関心をもつというだけでなく、まさに動物の一員なのだということを認めるのは非常に難しいかもしれない。しかし、もしそれができるのであれば、カントには閉ざされていた扉が開き、その向こうで興味深いことが見つけられるかもしれない。カントは「人間は目的そのものである。「なぜ動物が存在するのか」と問うことはできるが、「なぜ人間は存在するのか」という問いは無意味である」<sup>30</sup>と述べたが、われわれはこの禁止令に従わなくてよいのだ。

---

<sup>30</sup> Kant, *Lectures on Ethics*, paper on *Duties towards Animals and Spirits*.



——書誌情報——

原典 Mary Midgley, “The Concept of Beastliness: Philosophy, Ethics and Animal Behaviour,” *Philosophy*,  
Vol. 48, No. 184 (1973), pp. 111-135.

タイトル 獣性という概念——哲学、倫理学、動物の行動

著者 メアリー・ミッジリー

訳者 木下頌子

バージョン 1.0

初版発行日 2020年2月15日

連絡先 topichocola [at] yahoo.co.jp

※引用・参照指示の際は、たとえば以下のように表記してください。

メアリー・ミッジリー「獣性という概念——哲学、倫理学、動物の行動」木下頌子訳、電子出版物、  
2020年。[掲載サイトのURL、アクセスした日付]